

機関番号：23401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720239

研究課題名（和文）

タイ東北部における蛇毒の治療実践をめぐる知識人類学：日常的理解の分析枠組の構築

研究課題名（英文）

Anthropology of Knowledge about Folk Remedies for Snake Venom in Northeastern Thailand

研究代表者

津村 文彦（TSUMURA FUMIHIKO）

公立大学法人福井県立大学・学術教養センター・准教授

研究者番号：40363882

研究成果の概要（和文）：

本研究は、タイ東北部における蛇毒咬傷の伝統医療師（モーパウ）に注目し、治療実践と知識がもつ独自の論理を明らかにするものである。モーパウは、呪文や聖水を吹きかけることで、蛇やクモ、ムカデなどの咬傷を治療する。近代医療が対処を得意とするこうした咬傷に対して、伝統医療がいかなる「納得の様式」を構築しているかを考察した。本研究では、タイ東北部コーンケン県における数ヶ月間のフィールドワークに基づいてデータを収集した。

研究成果の概要（英文）：

The research aims to examine the practice and knowledge of traditional healers who mainly cure venomous snakebites in rural areas of northeastern Thailand. The traditional healers, called *mo pao*, treat wounds of venomous snakes, spiders, centipedes, or so by blowing holy water and magical spells. It aims to examine the mixture of magic and medicine in modern rural villages and to investigate the folk medicine to cure the snakebite which modern medicine treats quite well and to clarify the construction of the everyday logic of “understanding”. The ethnological study is based on several short-time fieldworks in *Khon Kaen* province of northeastern Thailand between 2008-2010.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学 文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学

## 1. 研究開始当初の背景

過去30年にわたる医療人類学では、近代医療と伝統医療（または民間医療、代替医療）に分け、二者を対比的に、あるいは統合的に配置して医療の多元性を論じてきた。近年では、両医療体系の混淆や複数の医療システムに通じた専門家の事例も検討され始めているが、それでもなおこうした対立図式は多くの研究に通底しており、[伝統-近代]枠組は基本的には維持されている。

だが、本研究の対象である蛇毒治療師は従来の図式を再構築する契機となりうる。つまり「近代医療」の血清療法が即効的に対処する〈蛇毒の咬傷〉に対して、慢性的病いに長期的に作用するとされてきた「伝統医療」の側の蛇毒治療がいかに対処しうるのか。研究成果は従来の医療人類学的枠組を大きく刷新する可能性を持つ。

呪的治療を併せて行う蛇毒治療師の実践は、宗教人類学的分析も同時に要請する。呪術研究は、エヴァンズ＝プリチャード[1937]

以来アフリカを中心に展開され、植民地主義と関連した社会変動論、言語哲学的傾向の強い災因論を軸に国内外から研究蓄積をみたが、呪術を同時代的な現代的事象として把握するには至らなかった。一方、東南アジアでは、90年代にWatson & Ellen [1993]により呪術をめぐる基礎研究が始められたものの、その後の展開は極めて低調であった。津村も加わった科研費基盤研究(C)「東南アジア・オセアニア地域における呪術的諸実践と概念枠組に関する文化人類学的研究」(平成16～17年、代表：川田牧人)では、「呪術そのものを人々がいかに語るか」という認知科学的アプローチのもと呪術の論理を探る試みを開始した。アフリカとは異なる東南アジアの呪術の特性についての研究はここにおいてようやく端緒についたといえる。

津村はこれまでタイ東北部を調査地域として、宗教と医療をめぐる文化人類学的研究を行ってきた。呪術師の宗教実践と精霊信仰、独自の伝承文字であるタム文字の書承文化、現代の薬草治療師における薬学的知識と民俗的知識の混淆など、近代以前から伝承された多様な知識が、現代の村落部においていかなる形で利用されているかについて研究を行ってきた。特に、呪術と薬草をめぐる研究から、非合理的事象を含んだ日常のなかでの「納得の様式」の特性について、「①事象の個別性、②物質的可視性・可触性、③信じること」の3点を指摘してきた[津村 2005]。日常的思考における現実の「理解」または「納得」は、しばしば非合理的だが、それでも理解し受け入れるのはいかなる論理に基づくものか。本研究は、この「納得の様式」について、蛇毒治療師の事例からその知識と実践を詳細に分析し、必ずしも科学的とは呼べない日常的な現実理解の構造を読み解く視角を提供する知識人類学の試みである。

[参考文献]

EVANS-PRITCHARD, E. E. 1937 *Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande*, Oxford: Clarendon Press.

津村文彦 2005 「伝統的薬草師の現代的様態—タイ東北部村落における専門的知識の研究」、『福井県立大学論集』, 第26号, 2005年7月, 13-32頁.

WATSON, C. W. and Roy Ellen (eds.) 1993 *Understanding Witchcraft and Sorcery in Southeast Asia*, Honolulu: University of Hawaii Press.

## 2. 研究の目的

これまで津村が研究を進めてきたタイ東北部では、農繁期の水田で農民が毒蛇に遭遇する機会が多い。特にコブラ科の数種の蛇は強い神経毒を持ち、咬まれた場合は病院に搬送しただちに血清治療を行うのが一般的で

ある。だが村落には蛇毒治療の専門家が現在でもみられる。彼らは、蛇やクモ、ムカデなどの毒を、呪文や聖水を吹きかけることで治療する。この「蛇毒治療師」の知識と実践が主たる研究対象とした。

本研究は従来の「精神的・慢性的な病い」とそれに対する「伝統医療」を扱う医療人類学的研究とは一線を画す。つまり「蛇毒の体内への侵入」という、「近代医療」が得意とする生化学的病症への、「伝統医療」の対処法について人類学的に考察するものである。さらには蛇をめぐる人びとの知識と実践、人と自然環境(蛇と薬草を含む)との関係が近代化の過程で組み換えられてきた局面を検討しながら、治療に関わる日常的な現実理解のあり方、いにかえるなら「納得の様式」を明らかにすることを目指すものである。

日常的な「納得の様式」については、自身の研究成果[津村:2005]に加えて、科学哲学[伊勢田 2003など]の成果をも踏まえ、主要な要素として以下の4点を仮定し、研究を進める。

- ①事象の固有性：ある事象について一般論や抽象論によるのではなく、本人または隣人・知人の固有の具体的なエピソードとして語られることにより、現実として受け入れること。
- ②宗教・信仰の日常性：同じ共同体の仏教や精霊信仰と関連することにより、土地の専門家もつ知識伝統の正統性が維持され、現実として受け入れること。
- ③物質的可視性・可触性：呪術的行為において、実際に目に見え、直接手で触れることのできるモノが媒介することにより、現実として受け入れること。
- ④日常的確率論：現代医学の病因論を支える「近代数学の確率論」とは原理の異なる、身体的なもつともらしさと結びついた「確率論」により、現実として受け入れること。

[参考文献]

伊勢田哲治 2005 『疑似科学と科学の哲学』, 名古屋大学出版会.

津村文彦 2005 「伝統的薬草師の現代的様態—タイ東北部村落における専門的知識の研究」, 『福井県立大学論集』, 第26号, 2005年7月, 13-32頁.

## 3. 研究の方法

本研究は、タイ東北部における蛇毒治療師の知識と実践を分析することで、人びとの日常的な理解の論理、「納得の様式」を抽出することを目指すものである。科学的論理とは異なる性質を持つ「納得の様式」は、〈事象の固有性〉、〈事物の多義性〉、〈行為の身体性〉などの特性を持ち[cf. 中村 1992]、日常生活のなかでの具体的な経験や語りのなかに立ち現れる。そのため、蛇やクモの毒に関する語りや治療事例を収集・蓄積し、記述を行う

ことが第一の作業となる。本研究が取りうる方法論は民族誌記述であり、伝統医療専門家の諸実践について綿密な観察と聞き取り調査を行う。

また国内においては、狭義の医療人類学や宗教人類学に限らない文献研究が必須となる。特に確率・統計に関する近代数学史や民俗数学を中心とした科学史・科学哲学的アプローチ[Bloor 1976]、アリストテレスやヒュームを初めとするとする因果論・合理性論などの哲学的アプローチ[一ノ瀬 2001]、近年の認知心理学の成果を取り入れた知識人類学的アプローチ、熱帯地域の爬虫類をめぐる動物医学的アプローチなど、多角的な知見を取り入れながら、伝統医療における日常的確率論や民俗動物学など、日常的な理解の構造を理解するために不可欠な素材を整え、「納得の様式」という新たな問題系の構築を行うことを目指す。

[参考文献]

BLOOR, David C. 1976 *Knowledge and Social Imagery*, Routledge & Kegan Paul.

一ノ瀬正樹 2001 『原因と結果の迷宮』, 勁草書房.

中村雄二郎 1992 『臨床の知とは何か』, 岩波書店.



地図1 タイ王国とコーンケーン県

## 4. 研究成果

### (1) フィールド概況

本研究では、毒蛇咬傷の伝統的治療という特殊な医療状況を研究するため、タイ王国コーンケーン県ムアン郡とナムポン郡の複数の農村において、参与観察とインタビュー調査を実施し、村落周辺での蛇の生息状況、毒蛇による被害数、モーパウ（蛇毒吹き消し師 *mo pao ngu*）の特別な知識の学習過程、吹き消しによる治療のメカニズムなどについてデータを収集した（地図1）。

いずれの調査村も戸数は300戸弱、人口は1000人ほどで、モチ米を中心とした農業を営んでいる。ムアン郡の調査地はコーンケーン市部から10数kmと近接し、コーンケーン市や国道沿いにある縫製工場などで就業する世帯がほとんどである。一方、コーンケーン市部から50kmほど離れたナムポン郡の調査村落は、農閑期を中心に菓草の販売を専ら行う世帯が多い村落で、菓草販売のための集客目的で、キングコブラなどの毒蛇を使ったショーを行う。地域の観光資源となっており、村落には多くの観光客が訪れるというほかにはあまりみられない特色がある。

### (2) 吹き消すことのできる「毒」

第一に、モーパウの治療実践について、「ピット・サムデー *phit samdaeng*」と呼ばれる症状の治療に関して情報を収集した。ピット・サムデーは、出産後すぐの女性がかかる病と考えられており、ある種のものを食することによって、発症するとされる。具体的な症状は、頭痛、腹痛、口の渇き、母乳の不足などで場合によっては死亡することもあるという。ピット・サムデーを引き起こす食物としては、バナナ、イモ、赤蟻の卵、アヒルなどで、人によってピット・サムデーを生ずる食物は異なる。また病院で治療を受けても症状が緩和するとされる。ある特定の食物を食べることで、体に不調を生じること、また病院治療でも症状が緩和するという意味では、近代医療で考えるところの「アレルギー *kanphae*」に近いものである。

ところが、ピット・サムデーは呪術師などの男性がタブー *kalam* を破ったときに生じる身体の不調に近いとも考えられている。また病院治療ではなく、ある種の菓草や、モーパウが「吹く *pao*」ことによって癒すことができるとされる。近代医療で治療可能でありながら、一方で伝統医療によって完治することが可能とも考えられているところは、毒蛇咬傷の治療にも類似している。両者を取り結ぶのが、「血にまつわる病」であることと、「身体に侵入する毒が引き起こす」と考えられている点である。これら2点が、モーパウ

の「吹く」という治療方法と深く関連していることは指摘できる。

### (3) 毒の不可視性

モーパウの治療範囲は「毒」との関連で画定することができる。モーパウが得意とするのは、蛇毒治療 *pao ngu* のほか、サソリやムカデ、クモ、ナマズの毒の治療や、産後間もない女性の食タブーに伴う「ピット・サムデー *phit samdaeng*」と呼ばれる病の治療などである。またモーパウによっては、子供の全体的な身体の不調、頭痛、目の充血・痛み、耳の外部の腫れ、火傷、帯状斑紋、火傷なども治療する。場合によっては人間だけではなく、ウシやスイギュウも治療の対象となる。

「ピット・サムデー」は、食物に含まれるある種の「毒 *phit*」が原因と考えられており、それはヘビやサソリ、ムカデなどの咬傷治療とも共通するし、目の痛み、耳の痛み、帯状斑紋など多くの病が体外から侵入した「毒」を原因として捉える。そのため、「毒を外部へと排出すること」がモーパウの治療実践が目指すところである。

ただ「毒」という概念については注意が必要である。ヘビやサソリなどでは、近代医療においても、物質的な「毒」の体内への侵入が想定可能であるが、モーパウが取り扱う病の多くではその「毒」というのは民俗的観念に過ぎず、近代医療の視座からは物質的な実体を持つものではない。

その非実体的な「毒」を「実体」として取り扱うために、モーパウの治療実践が構成されているとみることができる。言い換えるなら、「不可視のもの（病を引き起こす毒）を可視化する装置」としてモーパウの治療儀礼は位置づけられる。

モーパウの治療実践は、必ずしも薬草を必要とするわけではなく、場合によっては水と呪文だけで、様々な「毒」を排出することが可能とされるが、それは実体的な毒を対象としていないことに由来する。モーパウは見えない毒を可視化することで治療行為を完遂させる。モーパウによる可視化の仕掛けは多様である。患部から毒が広がらないように石灰で皮膚に図柄を描いたり、尖った針で呪文を身体上に書き付けたりする。またなかには、地面に呪文を書き付けてヘビの動きを制限するような呪術をもつ者もいるとされる。

こうした視覚的な効果は、患者の身体的な感覚にも直接働きかける。かつてキングコブラに咬まれたことのあるインフォーマントは、モーパウの治療を次のように語る。

「手首をキングコブラに咬まれて、そこが大きく腫れ上がり、痛い熱が手首から肘、肘から肩へと上へ上へと広がっていった。だがモーパウが肩から肘へ、肘から手首へと順番に呪文と聖水を吹きかけてくれると、モーパウ

の息がかかった部分が順番に冷たくなっていき、最後に熱は手の先から抜けていった。」

パウによる治療の近代医学的な効果はともかく、患者自身がこうした語りによって、モーパウの「非実体的」な治療実践を、「実体的」な身体感覚として表現していることは非常に示唆的である。モーパウ自身が持つ不可視のものを可視化する装置と、患者自身がもつ不可視のものを可視化する感覚の双方が、モーパウの治療実践の効果を増進させているものといえるだろう。

### (4) モーパウの病因論と知識

モーパウのもつ病因論と、他の伝統医療師がもつ病因論とのズレも浮かび上がった。薬草を主に利用するタイの正統的な伝統医療は、19世紀末から体系化され、現代的な文脈のなかで再活性化しているが、この薬草治療では、病は、人間の身体を構成する四要素 *that sii* (火、水、土、風) の不均衡によって説明される。一方、モーパウも治療に薬草を併用することがあるが、モーパウが用いる薬草の多くは四要素では理解できないと語る。薬草治療とモーパウの治療は原理が異なっているようである。モーパウの知覚は、近代化過程のなかで正統性が創造された「タイ伝統医療」から外れているだけではなく、タイ東北部に土着の「薬草治療」からも外れた位相にあるといえる。それらを土地の「伝統医療」と一括して語ることは難しく、特に呪文を用いたパウなどの伝統医療では、従来考えられていたような「四要素」による説明体系は適応不可能である。モーパウの「息を吹きかける」治療の基本原理は徹底しており、それは体外への「毒」の放出であることは、すでに述べたとおりである。

モーパウなど伝統的な医療師が呪文や薬草を獲得する手法には、[師匠-弟子]関係のなかでの教授のほか、「知識の交換」があることもインタビューから明らかとなった。彼らは高名な呪術師、伝統医療師の話を耳にすると直接その人を訪ね、多くの場合弟子となって知識の教授を受けるのだが、場合によっては、自分も持っている知識と相手も持っている未知の知識を「交換」することで新たな知識を入手することがかつては頻繁に行われた。何人かのモーパウは交換によってパウの技術を学んだと語っているし、調査者である私自身も、あるモーパウから呪文の交換を申し出られたりした。伝統的な知識が必ずしも総合的なものではなく、一つの特徴として、個別的、断片的な知識であることもここからうかがえる。

### (5) モーパウと患者の間の知識の不一致

モーパウの治療行為は不可視のものを可視化する試みであるとすでに述べたが、こう

した治療実践について、モーパウと患者の毒蛇咬傷についての考え方は必ずしも一致しているとはいえない。

まずは治療を受ける側の患者の知識分布を問題化したい。医療人類学的な研究の一般的傾向として、伝統医療を記述する際にはしばしば患者は差異なき集団として一様に描くことが多いが、現実的には患者内部は大いなる差異を含みこんでいる。毒蛇咬傷の場合は、モーパウの治療を強く信じる者、一部は信じるが一部は信じない者、完全に信じない者が、農村部においても混じり合いながら存在する。強く信じる者は、「この村に住んでいる者なら、みんなモーパウの治療が効くことを知っている」と語るが、一部しか信じない者は「おできの治療ではおばあさんが治ったのでモーパウは効くが、コブラに咬まれたら病院に行かなきゃダメ。パウでは治らない」と語り、また完全に信じない者は「あれは年寄りの迷信」と一笑に付す。伝統医療についての患者の立場の違いも現実に従って記述する必要があるだろう。

また施術者たるモーパウにおいても、その知識の分布は多様である。彼らの多くは治療の際に、自身の信仰するなにかに合掌をしながら供物を捧げる行為をとるが、その供物を捧げる対象である自身の信仰対象についての認識にも差異が存在する。ある術者は呪文 *khatha* に対して拝礼しているといい、また別の術者は自分に術を教えてくれた師匠に対するものだと説明し、さらに別の術者は直接の師匠ではなく、師匠の師匠とそのまた師匠と遡った先にある究極の師匠ブダに対して拝礼しているのだと解釈する。またタブー *khalam* も流派によって異なるだけではなく、それらのカラムの遵守の程度も術者によって微妙な差異が存在する。そうした術者間の違いを患者も細かく観察しながら、自分が治療を受けるさいのモーパウを選択する。こうした患者それぞれの知識と、術者それぞれの知識と実践の多様な組み合わせのなかから現実のモーパウの治療実践が編まれていることが描写できる。

#### (6) モーパウと近代医療との関係

調査村周辺では、伝統的な医療専門家が活動を行っているが、同時に村落住民は近代医療に依存していることがわかった。調査村でのインタビューによると、病いや怪我の際に、行政村の保健センターや郡の病院で一次的な治療を受けることが一般的である。近代医療の施設が村落部にまで設置されるとともに、村落間の道路が整備されたのは1980年代半ば以降のことで、医療面でのインフラが整うにつれ、住民の近代医療へのアクセスは大いに高まっているといえる。

さらに、2001年より当時のタクシン政権によって導入された「30パーツ医療制度」によって、安価な公的な医療サービスが可能になると、村落部の住民の近代医療へのアクセスは経済面からもより容易になった。行政村の保健センターでの治療が十分でない判断されると、郡立や県立のより大きな病院での治療を躊躇することがなくなった。

だが「30パーツ医療」を受療できる国立病院への患者が殺到するために、病院での待ち時間が長く、治療にはわずかな時間しかかけられないという悪評も多く聞かれた。「30パーツ」という額は、伝統医療師に支払う謝礼とさほど変わる額ではないため、近代医療という選択肢はもはや伝統医療とさほど変わらなくなった。だが、だからこそ逆に伝統医療の強み（個別の治療にかける時間の長さ、患者個人の履歴の重視）がより注目され、評価されている様子が明らかとなった。

毒蛇咬傷をめぐるモーパウによる治療と近代医療による治療の関係についても、具体的な治療例を集めるなかで、次のことが分かってきた。

大部分のモーパウや患者のなかでもモーパウの力を強く信じている者は、「モーパウにかかれば病院に行く必要などなく治ってしまう」と語るが、現実には、ほとんどの場合、毒蛇に咬まれると、まずは病院にかかっていることが分かった。病院で治療をしたあとで、回復期にモーパウを訪ねることが多い。モーパウの治療効果についての認識も病院治療のあとであるので、近代医療との関係のなかでモーパウへの信頼感が形成される。

たとえば病院で切開や壊死した指の切除を行った場合には、「私（モーパウ）のところに先に来ていれば、指を切り落とす必要はなかった」と語ることで、モーパウへの信頼感が高められ、「病院治療よりもモーパウの治療は優れている」という言説が補強されてゆく。パウしたあとで、病院治療後の患部の痛みが少しでも和らげば、さらにモーパウへの信頼は高まる。

モーパウの治療の多くは、そもそも近代医療のレベルでの「治る／治らない」とは異なった次元で作用をしていることが事例のレベルから看取することができた。

#### (7) キングコブラショーをめぐる村落内政治

KS村はおおよそ160戸のラオ系民族が居住する村落であるが、周辺では「キングコブラ村 (*muban ngucongan*)」として知られる。薬草売りを生業とする住民の多いこの村では、ある時代より、薬草の客を集めるためにキングコブラを用いたショーを行うようになり、現在は村内に舞台をも設けて積極的に観光振興にも乗り出している。この村落の歴史は、天水田稲作が主な生業であるその他のタイ

東北部農村の歴史とは大きく異なり、「村落商業」とも呼べるような特殊な発展の歴史を取っていることがうかがえる。

1912年に開拓移住によって開かれたコークサガー村は、穏やかな丘陵地にあり、その周辺にはいくつかの小川が見られ、稲作に適した土地として選ばれた。そのため、現在でもほとんどの住民はモチ米を作っており、商品作物としてウルチ米やキャッサバ、サトウキビなどを生産している。だが同時に現在ではほぼすべての世帯が薬草売りを行っており、また薬草を売るために2-10匹程度のキングコブラないしその他のヘビを飼育している。

薬草売りや、キングコブラの飼育は、観光の文脈ではこの村に伝統的に伝承されてきたものと語られることが多いが、実際はそれほど古いものではない。薬草売り自体も1950年代に始まったものである。1951年にK.Y.氏がある薬草を得て、周辺の村落を売り歩いたのが薬草売りの始まりである。K.Y.氏は、最初はコブラ、のちにキングコブラを使った簡単なショーを訪れた村で行って、人を集めて、観客に薬草を売るというやり方を創始した。村のなかで指導的な立場にあったK.Y.氏は村人にヘビの扱いと薬草についての知識を広め、コークサガー村が薬草とキングコブラの扱いで有名になった。1980年代には多くの村人がキングコブラを飼育しながら薬草を売り歩くことを行うようになり、村にも観光客がやってくるようになった。とはいえ、多くの村人は村でのキングコブラショーに関わっているのではなく、大部分の村人は自分たちで村外に出てショーを行いながら薬草を売ることを行っている。

現在ではスピーカーをつけたピックアップトラックを多くの世帯が所有しており、キングコブラを持参して、7日から10日ほどかけてタイ東部の各地をめぐり、薬草を売り歩くという形を取っている。この薬草売りの遠征は、乾期・雨季にかかわらず1年をつうじて行われる。だいたい1回の遠征で35,000-40,000パーツ(1パーツ=約2.8円)の売り上げがあり、村でのショーから得られるより多くの収入をもたらしている。一方、村落でのショーをめぐるのは、1990年代より村内が二つのグループに分裂して、2つの舞台を設置していたが、2011年1月8日よりこれらのグループが統合され、村の共有林を切り拓いて新たな舞台を設置した。

こうした村落の薬草とキングコブラをめぐる商売の発展の経緯と、村落内でのキングコブラショーを中心とした観光振興をめぐる住民間の衝突と再統合をめぐる聞き取り調査よりデータを得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①津村文彦, 「善霊と悪霊のはざま-タイ東部の村落守護霊をめぐる-」, 『東南アジア-歴史と文化-』, 第40号, 2011年5月, 査読有, 54-78頁.

②津村文彦, 「タイの精霊信仰におけるリアリティの源泉-ピーの語りにもみる不可知性とハイパー経験主義-」, 『福井県立大学論集』, 第33号, 2009年7月, 査読有, 1-24頁.

③Fumihiko TSUMURA, “Magical Use of Traditional Scripts in Northeastern Thai Villages”, in Masao KASHINAGA (ed.), *Written Cultures in Mainland Southeast Asia (Senri Ethnographical Studies no. 74)*, Osaka: National Museum of Ethnology, 査読有, 2009, pp.63-77.

〔その他〕

〔研究論文以外の出版物〕

①津村文彦, 「スリンの〈異世界〉を逍遙する」『月刊みんぱく』(国立民族学博物館), 第35巻第1号, 2011年1月, 22-23頁.

〔学会以外の研究発表〕

②津村文彦, 「呪い(まじない)とともに生きる-タイの呪術と癒しの世界」, 『いきいき長寿セミナー ラジオ放送講座テキスト』(福井県社会福祉協議会), 第22巻第9号, 2010年12月発行, 5-6頁.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

津村文彦 (TSUMURA FUMIHIKO)

福井県立大学・学術教養センター・准教授  
研究者番号: 40363882